

NON-FIT型のバイオマス発電所

パワーエイド
三重合同会社 松阪市内で着工、廃菌床など活用

パワーエイド三重合同会社(三重県松阪市、リンクスストーリーカヌー採用する。発電出力は1990キロワット)は10月17日、木材コンテナの「ウッドピア松阪(同市)内において、「シン・バイオマス松阪発電所」の起工式を開いた。三重県多気町にあるホクトの三重きのこセンターから排出される廃菌床(使用済み培地)や、主に中部圏から排出される木材・製造業生産副産物の他、RPF等を混焼し発電を行う施設

総事業費は約26億円に上る。2025年1月から商業運転を開始する予定とした。

同社では、PKSや木質ペレットといった輸入材ではなく、地域裨益型および地域循環型資源を活用する発電を目指している。ホクトの三重きのこセンターでは、マイタケやブナシメジを生産(年間6000トン)しており、トウモロコシの芯などでき

た菌床を培地として使用。1日当たり50〜60トンの排出される廃菌床をパワーエイド三重合同会社(松阪市)が買い取り、主燃料として活用する方針だ。また、発電した電力は、燃料サプライヤーであるホクトに対して15年間にわたり供給する予定という。

こうした製造業由来の農産副産物に着目した同社は、それらを「シン・バイオマス」と定義し、今年5月22日付で特許を取得した。「真」に利用されるべき、「新」なバイオマスエネルギーの形として、廃菌床の他、廃梱包材(木製パレット)や製品端材・木枠、茶

かす、コーヒーかす、ペーパーラッシュ(製紙汚泥)、不織布、放置竹、流木、RPFとい

つたさまざまな資源を扱う方針を掲げる。年間5000トンの廃菌床と、木質系副産物とRPFをハイブリッド燃料として1万3000トン調達する。発電した電力は、クリーン電力として燃料サプライヤーに供給。この新たな仕組みを「イ

(関連記事5面)



西川弘純氏



パワーエイド三重シンバイオマス 松阪発電所

起工式に参加した関係者

こうした製造業由来の農産副産物に着目した同社は、それらを「シン・バイオマス」と定義し、今年5月22日付で特許を取得した。「真」に利用されるべき、「新」なバイオマスエネルギーの形として、廃菌床の他、廃梱包材(木製パレット)や製品端材・木枠、茶

ンターナルカーボンサーキュレーションシステム」と名付け始動する。同社は、「FITの認定を受けないNON-FIT型事業であり、地方創生型カーボンニュートラル新産業として脱炭素社会に貢献していく」とした。

(5)

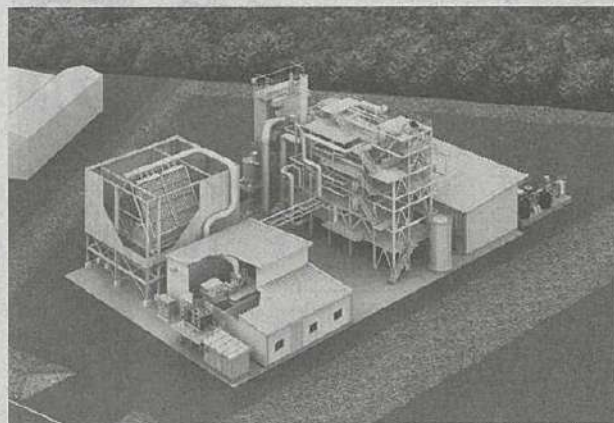
2023年(令和5年)11月13日(月曜日)

週

「シン・バイオマス松阪発電所」着工

パワーエイド三重合同会社

中部圏の木質系副産物など燃料に



フロントイメージ

パワーエイド三重合同会社(三重県松阪市、職務執行者・西川弘純氏)は10月17日、新たな発電事業を立ち上げるため、三重県松阪市内で「シン・バイオマス松阪発電所」を着工した。同発電所では、三重県多気町に所在するホクトの三重きのこ

センターから排出される廃菌床や、中部圏で発生する木質系廃材やRPFなどをハイブリッド燃料として活用する。FIT制度によらないNON-FIT型事業であり、新たな脱炭素電源開発事業として期待が寄せられ、同事業に日本アジア投

資、長谷工コーポレーション、BMEコモ、レクスポート、J A三井リースが出資参画した。

パワーエイド三重合同会社は、計画当初から「FITありき」の発電から脱却することを決めた。FITに頼らない再エネ発電を構想していたちょうどその頃、きのこの生産・販売大手のホクトより、三重きのこのセンターで1日当たり50〜60ト排出される、大量の廃菌床(使用済み培地)を燃料として活用できないか打診を受け、燃焼試験を実施したところ、低位発熱量で3400キロワット有することを確認した。

同発電所では、▽廃梱包材▽製品端材▽木枠▽茶かす▽コーヒークス▽ペーパースラック▽不織布▽放置竹・流木▽RPF―なども併せて活用する。従来、廃棄されてきた製造業由来生産副産物を有価買い取りすることで、燃料調達先の廃棄処分費用の削減だけでなく、自社由来炭素電源の確保、企業内炭素循環証書(環境価値証書)の発行等にもつながれるとした。

同社代表社員の西川幸成氏は、「パワーエイド三重合同会社の発電所に対して、松阪市より企業立地促進奨励金の助成が受けられなかった。その理由は『再生エネの中でもバイオマス発電所が飽和状態にあるため』とのこと。当社の理念と自治体との足並みがそろわなかった点が残念に思う」と語った。(関連記事1面)

建設系